

図書室より「新着図書」のお知らせ

三島屋変調百物語 七之続

『魂手形』 宮部みゆき

大人気シリーズ 最新刊!!

「語って語り捨て、聞いて聞き捨て」江戸は神田の三島屋で行われている変わり百物語。美丈夫の勤番武士は、国元の不思議な〈火消し〉の話、団子屋の屋台を営む娘は、母親の念を、そして緋背な老人は、木賃宿の泊まったお化けについて語り捨てる。三人の語り手の物語と、三島屋に届いた慶事の報せをきっかけに、富次郎は自らの行く末に思いを巡らせていく。

第13回 新井賞受賞!!

『俺と師匠とブルーボーイとストリッパー』 桜木紫乃

「どん底だって、笑って生きていく。」ギャングに溺れる父と、働きづめの母から離れ、日々をなんとなく生きる二十歳の章介。北国のキャバレーで働きながら一人暮らしをする彼は、新しいショーの出演者と同居することになった。「世界的有名マジシャン」「シャンソン界の大御所」「今世紀最大級の踊り子」…店に現れたのは、売り文句とは程遠いどん底タレント三人。だが、彼らと言い合いをしながらも笑いに満ちた一か月が、章介の生き方を変えていく。

『灰の劇場』 恩田陸

「私は確かにその二人を知っていた。もっとも、私はその二人の顔も名前も知らない。」きっかけは「私」が小説家としてデビューした頃に遡る。それは、ごくごく短い記事だった。一緒に暮らしていた女性二人が橋から飛び降りて、自殺したというもの…その記事は「私」の中でずっと「棘」として刺さったままとなっていた。ある日「私」は、担当編集者から一枚のプリントを渡される。「見つかりました」一彼が差し出してきたのは、新聞記事のコピー。ずっと記憶の中にだけあった記事…記号の二人。次第に「私の日常」は、二人の女性の人生に浸食されていく。

高瀬庄左衛門御留書 砂原浩太郎

神山藩で、郡方を務める高瀬庄左衛門。五十を前にして妻を亡くし、息子も事故で失い、ただ陰しく老いてゆく身。息子の嫁・志穂とともに、手慰みに絵を描きながら、寂寥と悔恨の中に生きていた。しかしゆっくりと確実に、藩の政争の嵐が庄左衛門に襲ってくる。